

教育的環境としての大学の研究

北星学園大学の教育的環境の継時的研究

土 橋 信 男

北 星 学 園 大 学

近年大学がますます学生にとっての勉学の場ではなくなってきたと言われている。教室における私語が問題とされ、大学はレジャーランドに化してしまっていると嘆く声も多く、それに共感する大学人は極めて多いように見受けられる。

はたして大学はレジャーランド化してしまっただけであろうか。また、もしレジャーランド化したのであれば、それは大学がそうしたのであろうか、または学生によってもたらされたものであろうか。

大学はどここの国においてもその設立以来、その社会のあらゆる分野における指導者の養成機関として期待され、また機能してきた。大学はいわばエリート教育の場として考えられてきたのである。ところが、社会の民主化に伴い教育の場が拡大され、大学もまた大衆へと門戸を開くようになった。それが最も早く行なわれたのはアメリカにおいてであり、ついで我が国にその現象が起こってきた。すなわち大学はもはやエリートのための教育機関ではなく、明らかに大衆のための教育機関なのである。

社会の民主化は望ましい現象であろう。しからば大学の大衆化／民主化ははたして望ましい現象であろうか。

この問にどう答えるかはさておき、大学の大衆化は好むと好まないとに拘らずもはや避けられない現象であり、それにどう対応するかが今日の大学に課せられた課題であるといえよう。

大学の大衆化がもたらした決定的な現象は学生の質の変化である。能力、意識、態度等が異なる学生たちが大学へ入ってくるようになったのである。

しかし、学生がどう変わろうと大学は大学であり、その教育の基本的な原理は変わるべきではないといえよう。すなわち、大学における教育は学生が主体となるように行なわれるべきであり、そこにおける勉学は自立的に行なわれるべきであろう。

そのためには、大学がさまざまな学生に対応できるような教育環境を提供する場であることが要求されよう。

本研究はこうした問題意識により、教育環境としての大学のあり方を探ろうとするものである。すなわち、本研究は、札幌の一地方私立大学（北星学園大学、4年制共学、文学・経済2学部、学生数2500人）の学生を対象とし、そこにおいて学生が近年どの様にその大学環境を認知してきたかを継時的に明らかにしようとするものである。学生がどのように環境を認知しているかはかるものとしては、ペイスの開発したCUESをもとに作られた日本版CUESを用いた。

日本版CUESは立教大学において開発され、まず用いられ、その後いくつかの大学において用いられてきているので、本調査の結果については、それらの調査結果と比較分析を行ない、大学の教育的環境についての考察を進めたい。